

早稲田大学博士論文(概要)		
	学位記	文科省報告
2004	3874	甲 ②1912

本書は「初期道教經典の形成」と題する、主として後漢中期から東晉末頃までに出現したと考えられる道教經典群の成立に關する一連の考察である。

ここである初期道教經典とはおおむね、後漢の太平道・天師道（五斗米道）の發生から、劉宋期に端を發する道教經典の三洞四輔分類による道藏結集の開始までに形成されたそれを指して呼稱することとする。儒教や佛教と並んで一派を唱えるに至るその以前の、やがては古層の道教經典として道藏の一角を占める經典各々の形成を主眼とする。それでは、それは研究史の當初から觀念されてきた「道家は哲學、道教は宗教」との枠組みの踏襲かと問われれば、本研究開始當初の筆者にそうした暗黙の前提がなかったとは言えないが、纏める今の段階に當つては、それとは異なる認識を得ている。これについては後に述べる。

儒家・儒教の用語に内容上の差異が考えられないのと同様、道家・道教を用語的に分離することには本來無理があり、一時の研究史に貢獻し得たかとは考えられるが、同時に極めて不幸な用語設定ではなかったかとの憾みもなくはない。もちろん、現在の用語でいう先秦以來の道家と、後漢以後の道教とは、思想だけを比較しても明らかに異なる要素があり、その多くは、おおむね擔い手となった社會的階層の差に起因するものと考えている。儀禮の有無なども辨別の資となろう。それは道家・道教に限った特異な歴史的變容であったかもしれない。今後、研究者はこれを超える専門用語を模索していかなくてはならないであろう。しかしながら、ここで宗教的道家などという表現で後漢以

降のそれを呼稱し始めるとすれば、現状ではまだ無用の混亂を招きかねないであろう。<sup>(1)</sup>

それでも、いわゆる先秦道家の、たとえば「道家」の語の初出は「史記」卷一三〇太史公自序所引の司馬談「六家之要指」であり、<sup>(2)</sup>「老莊」の初出は、「淮南子」卷二「要略篇」の「道應者、……考驗乎老莊之術」であるように、後世の者がそれらをやつと結びつける。先秦道家の段階でも、彼ら自身が一箇の思想集團に屬すると認識することはなかつたようで、斷絶は當初から存在していたのである。どうやら、後世に至つて彼らを概括するとき、或いは何者かからの先例として、かつて道の名の下に説かれた教説を想起するとき、そこに系譜的意識が觀念され、構想された粹組みが表出され、場合によつてはそれが存続することもあるが、多くは構想のかけらを殘して、道家・道教という最大級の粹組みの中へとまた埋没してゆく、時には架空の系譜すら含まれる非連續の連續の總體を、かううじて道家・道教の動態とするのではなからうか。<sup>(3)</sup>

もちろん、天師道（五斗米道）・太平道發生以降のそれは、それこそ宗教的道家として、擔い手を完全に民間化しての再登場なのであるから、決定的な轉換點であるし、やがて劉宋の陸修靜あたりの提唱に始まる三洞四輔といった道典結集運動が、新たな側面を加味したことは無視できない。前者を初期道教、後者をたとえば成立道教などと呼んで區別することも可能であろう。

道家・道教を差別化に用いたのは、多分に日本語の問題であるが、區別自體が誤りというわけではない。區別には理由がある。それでも、誰が最初に用いたのかは定かではないが、たとえば、新天師道などというのいかなものであろうか。冠諱之に主導され、その没後に繼承された様子のない教法に新天師道の名を冠することは、天師道自體の歴史に無用の混亂を與えているのではなからうか。

こうした用語例にいったん、疑問符を付け、研究の進展に即して再構築しなくてはならないであろう。およそ規定

された概念は、創造的破壊を前提に据え置かれた暫定に過ぎないという但し書きを伴うものと認識しなければならぬ。

ただ、本書の括りは、第五編の「天師道の展開」、第三章「大道家令戒の形成」に根拠を求めることもできる。「大道家令戒」は、東晉の末、孫恩・盧循の亂の直前に、その母體ともなった杜子恭の治に属する信者たちに對して、おそらくは杜子恭により、張魯の名のもとになされた啓示であると筆者はみなし、そこで構想された教法前史の中で認定されたのが、「太平經」であり、「妙眞經」であり、「黃庭經」などであった。「妙眞經」は「西昇經」と、「黃庭經」は「老子中經」と密接な關係を持つ。さらに、老子化胡説も教法前史に觸れられていて、「大道家令戒」の教説は、本書を規定するのである。

このように、本書で言う道教とは、杜子恭なる東晉末の一道士によって構想された教理史の中で、一連のものと認識された諸教法を指していう。<sup>(1)</sup>この道士は、いわゆる道家の内、老子は選んだが、莊子や列子、また抱朴子などは除外した。抱朴子・葛洪はいわば擬似科學的立場ともいうべき神仙術の徒であつて、もとより宗教的人士ではないため、選ばれなくとも無理はないであろうが、莊子などの代表的な道家が選ばれていないことには注目すべきであろう。東晉末の一道士からみて、莊子らは彼らの先蹤ではなかつたのである。

それでもそれは、道家・道教を辯別する根拠としない。それは限られた特殊な立場からする構想であつて、これは道家・道教の全史に遡及させるなにかではない。<sup>(2)</sup>

筆者は、ここでは一道士の幻視に出發する一連の教法史に關して、舊來の用語例に従つて初期道教と假稱する。おそらくは、この教法結果の構想に端を發して、やがては三洞四輔といった道典結果の方向へと展開し、ひとつの有力な立場を堅持するに至るが、それはあくまでも時代に限定された教法であつて、繰り返すが、前後の歴史を規制する

ものではない。それでも、往時に、たった一人の道士の構想にその端緒が見受けられるとするならば、それは、こうしたことの繰り返される道教史の中でも、とりわけ注目値する事件であったといえるのではなからうか。

## 第一編 太平經の研究

第一章 「六朝時代に於ける干吉傳の變遷」は、「太平經」の前身である後漢の「太平清領書」の「感得」者という干吉なる實在した人物の傳記をまず位置付け、次いで後に様々に擴大された傳説化の系譜を整理することによって、六朝の道教諸派における干吉の位置をたどった。そのことは同時に、從來、その引用例が見當らないために、斷絶したかにも思われた六朝時代に於ける「太平經」の隠された傳承をたどる試みである。

第二章 「再出本『太平經』について」は、前章で涉獵した資料を「太平經」への言及に絞り、その再検討を踏まえて、偽作説さえ説かれた現行の「太平經」を、六朝末の再編集によるものとする見解を明らかにしたものである。隋代編纂の逸書、「玄門大儀」の三洞四輔解題は、その一部が唐初の「道教義樞」卷二、北宋の「雲笈七籤」卷六に見え、主にこの遺文をどう読み解くかで、大淵忍爾博士、福井康順博士、吉岡義豊博士の見解が相違していたが、これらに批判を加えて自説を新たに展開した。<sup>(6)</sup>

第三章 「『老君說一百八十戒序』の成立について」は、「太平經」の來歴資料として重要な言及例とされてきた「老君說一百八十戒序」について、まず諸本をもとに校訂を行い、その原型の成立を劉宋期とした上で、内容の混亂などから後世の加筆を指摘し、むしろ六朝末の「太平經」再編の後で、現在のような改變の施されたものと推測した。<sup>(7)</sup>

## 第二編 老子化胡經の研究

第一章 「老子の行方」は、本編の序説に當るもので、「史記」卷六三老子傳によつて周を去つたとされる老子の行方について、當初、神話・傳説に導かれた様々な候補地のあつたこと、またその一方で、交易によつて開かれた西方への關心により、老子の旅先が左右されたことなど、化胡説の前史を探つた。化胡説に主導されたというよりも、老子の西方への旅は、中國文化自體の憧憬の中から、その一端として生起したと位置付ける。<sup>(3)</sup>

第二章 「老子化胡經」と「清淨法行經」は、老子がインドに赴いて、自身が、もしくは弟子が釋迦となつたとする「老子化胡説」に對抗するものとして、佛教側から提示されたのであろう「三聖派遣説」があるが、近年、これを収載する「清淨法行經」零本が発見され、その内容全體を検討することによつて、兩説の説かれたと考えられる社會的階層を探り、延いては「老子化胡經」の形成の場を想定した。

第三章 「老子化胡經」の説かれた場所」は、それが中央で説かれたとの従來說に對し、地方的・文化的意味としての中央と地方など、多元的に捉えることが可能であるとし、前章の管見から、化胡説を文化的地方で説かれたものとした。

第四章 「佛道論争に於ける諸問題」は、上記の二章の附篇として、化胡説などをその背景とする中國宗教史上の佛道論争について、從來、ともすれば純然たる教理論争を中心とする宗教的エリート<sup>(4)</sup>の抗争であつたかのような豫想のもとに考察されてきたが、信仰の形態に諸相のあることから照射すれば、兩者はむしろ混交状態にあつたこともしばしばであつて、理解の度合いもまた種々あることは昨今も變わらず、その考察には複眼的視野の要求されるべきこと

とを指摘した。

## 第三編 老子西昇經の研究

「老子西昇經」は、道藏の三洞四輔分類の太玄部に、「老子道德經」本文並びにその注釋について列せられ、歴代の教理書に引用されることが多い重要文獻であるが、從來、その來歴や成立といった基礎的研究は爲されず、思想分析も引用例の一部にむしろ佛敎に共感するかのような内容の見られることもあつて、充分な検討が施されては來なかつた。本書で取り上げた經典の多くは、形成された際には決して初めから道教經典として成立したわけではなく、それぞれが個別の事由によるが、本書はその典型例といつてよい。

第一章 「老子西昇經」のテキストについて」は、歴代の著録や注釋に關する書誌學的問題を扱い、現行諸本を勘案して校本作成に及ぶ試みである。<sup>(9)</sup>

第二章 「老子西昇經」の思想とその成立」は、上記の成果をもとに、その思想的立場を探求するもので、本書の成立年代を東晉中期以前とみなした。

第三章 「佛道論争に於ける「老子西昇經」」は、本書が本來、道教經典としてではなく、道家という傳統思想と佛敎の折衷的立場で述作されていたため、道教經典の中に取り入れられた後も齟齬をきたすことがあり、佛敎との論争が生起すると、しばしば本書は批判の對象として取り沙汰されることとなつた。ここでは、その状況を總括する。

第四章 「老子妙眞經小考」は、「老子西昇經」とは一連の經典として扱われながらも、いつしか散逸してしまつた本書の來歴や成立について考察し、諸書に残された佚文を集めた。「老子西昇經」にやや遅れて、東晉後期の成立と

した。

#### 第四編 老子中經の研究

第一章 「老子中經」覺書」は、本編の唯一篇の論考であるが、神仙術の一である瞑想法で、身體の各部位に宿るとする體內神を内觀するという「存思」を文書化した本書に至るまでの諸系譜をたどり、一連の關係文獻に言及しながら、その成立に至るまでの長編となった。成立自體は「黃庭（外景）經」の方が古いが、謎めいた韻文で書かれたそれをテキストとすれば、本書は後出であるとはいえ、そのマニュアルのごとき位置にあるものとみなした。<sup>(10)</sup>

#### 第五編 天師道の展開

第一章 「房祠破壊と道士の原像」は、前漢武帝期に肥大した國家祭祀の縮小整理により、職業的宗教者が放出されたことを端緒に、民間にも信仰形態の變容が持ち込まれて、對象であった鬼神の排斥という事態も生じた。それは信仰のありようの見直しであり、こうした活動のさなかから道教的立脚點の萌芽が醸成されたとする試論である。

第二章 「杜子恭とその後裔」は、東晉末に孫恩・盧循の亂の母體となった天師道集團である杜治の創始者、杜子恭とその子孫の傳記資料を集成し、とりわけ、從來、杜子恭と同定されることのなかった「洞仙傳」中の杜珣傳（『雲笈七籤』卷一一一所收）に着目し、その活動の期間や教法を探った。とりわけ、彼によって幻視された張魯の名のもとにその教法が展開されたことは、北魏の寇謙之の先例としても注目すべきことであり、南朝天師道の起點として



重要な位置を占めると考える。

第三章 「大道家令戒」の形成」は、從來、三國魏・北魏・劉宋末成立など、「老子想爾注」と共にその成書年代については様々に論じられてきた「大道家令戒」を、筆者は東晉末成立とし、その述作者を杜子恭とみなした。孫恩・盧循に至る反亂前夜の不安な空氣の中で、杜治の信者たちの同調を防がんと作成されたものと考えられる。そこでは、大道によつて説かれたとする、人類救済のための諸教法の歴史が連ねられ、天師道はそのいわば集大成といった位置にあつたかに構成されている。或いは往時の杜治で用いられていたのであろう「老子想爾注」・「老子妙真經」・「黃庭經」などを、互いに矛盾のない教法として許容する。これらは、杜治の抱えていた矛盾を一氣に解決するために述べられたのであろうが、それは幻視された張魯の名のもとに説かれた。しかしながら、その大同團結的姿勢は、これに留まらず、後の道教經典結集運動の指針である三洞四輔の先例とも言うべく、かくて、道教の重要な條件の一端は、杜子恭の幻視から構想されたといえるのではなからうか。

本書を「初期道教經典の形成」の名でひと纏めにし得るのは、「大道家令戒」に登場した教法や經典は、いずれも冒頭から考察した經典類の關連文獻であり、ここである道教とは、まさに杜子恭によつて虚構された教法の蓄積そのものである。その道教とは、それでも、三洞四輔構成に顕著ないわゆる成立道教の枠組みの先蹤といつて過言ではなからう。

## 附編 六朝道教經典をめぐる諸問題

第一章 「敦煌本」と「道藏本」の差異について」は、資料をいわゆる古靈寶經に限定して、差異の著しい兩本の

先後を考察し、佛教用語をより多く含む敦煌本を原本に近いものとする。原本成立時の經典は、佛教を敵對する勢力とみなさず、むしろ自らの側にあるものとして共感し、當初は積極的にその教理を受容していた痕跡を探った。

第二章「業報と注連の間」は、因果應報はそれを爲した個人の自業自得であるとする佛教の觀念に對し、中國の傳統的應報觀ではその家にかかるとされ、佛教傳來の後も、しばしばこれが混同されがちであったことが、道教の應報觀に顯著に見られることを指摘した。この錯誤は文學作品その他にも多く見られ、中國の應報觀一般で決して見逃せない觀念であることを指摘した。

第三章「所謂『茅山派道教』に關する諸問題」は、從來、六朝道教の主流派を、陶弘景を中心とする上清派道教とみなす見解があり、遡っては陸修靜までもが茅山派であったかのような認識が一般概説書にまでも展開されていることについて、その枠組みの誤謬を批判し、むしろ陶弘景の立場の特殊性を指摘した。

本編の三篇は、次の時代區分（三洞四輔成立以降）に屬する内容にわたり、組織的な道教の胚胎過程の錯綜狀況を示すことに、上記諸篇との連續性が認められると考えられるため、附編とするに値するものと考えられる。

#### 注

(1) かつて、日本道教學會の機關誌『東方宗教』で「道教關係圖書論文目録」の編集を擔當したことがあるが、歐文篇を扱った際、表題に Daoism とあるからといって、必ずしも宗教的なそれを指すとは限らず、老莊を扱っている場合もあつて、ある程度の内容把握をしなければ採録を決められなかった経験がある。すべてを採録すれば問題ないのであるが、當時は Daoism といえ、まだ歴史的に老莊の方が多く、日文篇や中文篇でも老莊を加えるとなると、分量的にも收拾がつかず、困惑したものであつた。

逆に、二十年程前に來日した臺南の陳榮盛道長に、ぶしつけにも筆者は、道教はいつ始まったと考えるか、と質問したこ

とがあった。その際に返された答えは「黄帝即位以來、四千年」とのことであった。このとき以來、筆者は、研究対象を豫めする前提で分析することを戒め、研究結果から得られる當面の結論に止めることと決意した。せいぜい研究の中間報告としての規定しかできないのではなからうか。あるいは、中華文化圏に生活する宗教信仰者が、その一部に、たとえば觀音信仰を含む場合でも、彼らが自らの信仰を道教と呼ぶならば、研究者はそれを否定する權利を持たないであらう。研究者は、追認しかできないというハンディを持つと考えている。

- (2) 『史記』には、この外、卷二三禮書「孝文好道家之學」、卷五六陳丞相世家「陳平曰、我多陰謀、是道家之所禁」と見える。
- (3) このことは、道家・道教に限らず、儒教・佛教を初め、ありとあらゆる概念規定に附與されるべき限定であるはずで、この際、舉げ直すことのできた、それこそ老莊思想的問題意識であつた。いつか道家史という觀點で、道家・道教の通史を考へてみたいものである。

なお管見は、『福井文雅』「道家と道教の系譜とその問題點」(『道教の歴史と構造』所收、五曜書房、一九九九)に着想を得ているが、文責はもちろん筆者にある。

- (4) なお、小林正美博士に「道教」の構造と歴史(『東洋の思想と宗教』一三所收、一九九六)という雄編があり、道士の宗教としての道教という主張が展開され、一方の立場を堅持し、それはそれで相異點を明確にすることに於いて正しい。しかしながら、日本語としての道教と、初期に於いて構想された枠組みがいつまで有効であつたかという點で疑問が残る。初期道教は今日の道教ではない。概念規定は、容易なことではなからう。

- (5) 一方で、後漢以後の道教の共通點を模索したのが、第五編第一章の「房祠破壊と道士の原像」である。新興宗教としての道教は、舊來型の民間信仰に對して攻撃的であり、天師道以降のそれを、鬼神信仰一般に對する優越的意識に特徴付けた(こうした意識が道家に遡って存在したであらうか。今後の課題としなくてはならない)。それでも、そこで同時に指摘したように、こうした意識は道士の自覺によりけりで、しばしば民間信仰の中に埋没しがちであり、埋没していながらも、彼らがそれを道教と呼ぶのであれば、優越的意識を常態とするわけにはいかないであらう。

- (6) 大淵忍爾「敦煌鈔本S.1226『太平部卷第二』について」(同『道教とその經典』所收、創文社、一九九七)は、管見にあ

る程度の評価を與えて頂けるものの（注）一九參照、五五五頁）、「道藏本太平經は後漢の太平清領書の後身であり、再編の跡は認められない」（五五二頁）とする。六朝末の編集に際して、『太平經』本文にいささかの加筆もなかったとするが、それはあくまでも、かくあれよかし、の博士の道教史観による見解ではなからうか。中國古典一般の來歴を考えるならば、加筆の可能性は否めないであらう。それでも、管見の及ぶ限りでは、『太平經』全體の思想に齟齬を生じさせるような新思想の甚だしい注入はなかったと思われる。あくまでも、程度の問題である。神塚叔子「太平經」の承負と太平の理論について、「太平經」における「心」の概念」（『六朝道教思想の研究』所收、創文社、一九九九年）は、現在、『太平經』の思想を分析する最重要論文と考えるが、こうした論考の達成こそが、その證左となるのではなからうか。なお、増尾伸一郎・丸山宏編『道教の經典を読む』所收の拙稿「『太平經』——平安を冀求する在野からの提言」（大修館書店、二〇〇一）では、若干の批判を試みた。

（7）ベンジャミン・ベニイ著、前田繁樹譯「老君說一百八十戒における道教と佛教」（山田利明・田中文雄編『道教の歴史と文化』所收、雄山閣、一九九八年）は、戒自體の内容に関する詳細な考察を展開している。

（8）本編はすべて『老子化胡經』成立の原像を探る試みから成るが、もとより佚書であるだけに、試論に終始した憾みがある。今後、『老子化胡經』ならびにその系統文獻の佚文を蒐集し、検討を加える作業を果したいと考えている。

（9）劉屹「試論〈化胡經〉產生的時代」（『道家文化研究』一三、一九九八年）には、拙稿に對する論評があり、西昇經の本文校訂に異論を述べ、たとえば「吾之身也」を原文とする（二〇一頁）が、論據を言肯することができない。

（10）本稿の後、思想内容のより詳細な分析を展開した論考に、加藤千恵「『老子中經』と内丹思想の源流」（『東方宗教』八七、一九九六）がある。